

日本最北に位置しながら、年間三百万人を動員する旭山動物園。かつては廃園の危機に瀕しながらも、園長の小菅正夫氏のリーダーシップのもと、独自の展示方法によって苦境を打破したこの動物園に熱い視線を送るのは、同じくローカル線赤字、廃線という苦境を「開発力」をもって乗り越えようとするJR北海道副社長の柿沼博彦氏である。ともにハンディを個性と見て、新しい道を切り拓いてきたお二人に、感奮興起の軌跡をお話しいただいた。



かつてない発想は 感奮興起から 生まれた

ハンディこそ個性である

旭山動物園名誉園長

対談

小菅正夫

こすげ・まさお——昭和23年北海道生まれ。48年北海道大学獣医学部獣医学科卒業後、旭川市旭山動物園に入り、キノボリカンガルー、キリンなどの創育担当、獣医師として勤務。51年飼育係長、副園長を経て、平成7年から園長、21年名誉園長に。

JR北海道副社長

柿沼博彦

かきぬま・ひろひこ——昭和18年栃木県生まれ。44年北海道大学大学院工学研究科修士課程終了後、日本国有鉄道入社。新幹線設計などを担当し、国鉄民営化に伴いJR北海道へ。専務取締役鉄道事業本部長などを経て、平成17年より現職。同年紫綬褒章受章。DMV開発のドラマは「走れ！ ダーウィン」（網島洋一著・中西出版）に詳しい。